
.*. にじ .*.
,. ,.

麗奈美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

；*： にじ ；*：

【Nコード】

N9268C

【作者名】

麗奈美

【あらすじ】

あの時、沙結花に出会えたことは運命だと思うよ。覚えてる？あの時、2人で見た虹キレイだったよね！！あたしと沙結花いつまでも一緒にいれるんだと思ってたのに……

ブログ

あの日あたしは沙結花に出会えたこと
絶対忘れないよ。

沙結花はいつもあたしに優しくて、
あたしは沙結花になにもお返しできなくて・・・
ごめんね・・・。

いろいろ迷惑ばっかかけちゃって。

沙結花は、あたしと出会えて本当に良かった？

あたしはさァ自己中だけどいつも沙結花は

あたしを受け止めてくれた。

お互い何でも言える仲だったよね。

あたしは、そんな沙結花のこと『心友』

だと思えたよ

いろいろありがとう!!

出会い

『麗奈美れなみ！起きなさいよ。今日は入学式でしょ！』

とあたしのお母さんが寝ているあたしを起こそうとしている。
でも、あたしは起きない・・・。

お母さんはあたしの部屋の窓を開けたら、太陽の日差しが
パァーッと窓から入ってきてあたしはまぶしくて

1度目を開けた。

『んーん・・・。』

と言いまた寝てしまった。

『麗奈美！早く起きなさい。いつまで寝ているの？』

お母さんはそう言った。

あたしは『んーん・・・ハアアア』

と1回あくびをして起きた。

時計を見たら『6時25分』だった。

あたしはベッドから降りて、パジャマのまま

1階に行くために階段を下りた。

あたしの家は、2階建てで横長の家に住んでいる。

1階にはお母さんだけがいた。

朝食は、トーストのパンにいちごジャム・・・あと紅茶が用意されてる。

あたしは急いで朝食を食べた。

あたしの家族は、お父さん、お母さん、あたし、妹の麗美れみね音の4人で住んでいる。

急いであたしは2階の自分の部屋に戻った。

そしてあたしは、初めての制服にそでをとおした。

少し長めのスカートもしっかりひざ上にして、

自由の胸のリボンはピンクにし

髪は茶パツで2つにしばり左耳には輝くピアスが3つ・。そして、カバンには大きなハイビスカスのかざりやキーホルダーがたくさんついている。

今日から高校生！！

あたしは急いで階段を下りてリビングに行くとお母さんがいてお父さんがいて麗美音もいた。

『麗奈美その格好で学校行くの?!』

とお母さんが聞く・・・。

『うん!・・・??』

『ピアスはずさなくていいの??』

『へーきへーきッ』

と答えた。

お父さんが

『麗奈美1時間まにあうのか?』
と聞く。

・・・。

『あゝっ!!6時58分・・・ヤバイ!』

と言ひ玄関に向かって走る・。

靴をはき玄関のドアを開け

『行ってきまーす!!』

といって外に出た。

出会い2

家から歩いて15分のところに駅がある。
そこから電車にのって20分すると左側に『私立美桜高等学校』
が見えてくる。

そこがこれからあたしが通う高校。

電車からおりて5分歩くと学校につく。

桜が満開のキレイな校舎

響きわたる生徒の挨拶の声・・・

学校の門まで来るとさすがに緊張した。

あたしはドキドキで学校の門をくぐった。

学校の玄関付近に新1年生のクラスがはられている。

あたしも自分のクラスを探した・・・。

1-1・・・青井・・・伊東・・・倉田・・・

1-2・・・和泉・・・川井・・・黒崎・・・

『あつ！あつたあー！！』

思わず叫んでしまった。

そしたら近くにいた子が話しかけてきた。

『あつ・・・あの・・・もしかして1年2組??』

『うん！そうだよっ』

とあたしは言った。

『あつ！私、黒崎 実菜って言います。』

実菜って呼んで下さい。よろしく』

『あたし川井 麗奈美』

麗奈美って呼んでね！！』

これが実菜との出会い。

2人は自己紹介をした後にお互い違う中学からなので
中学の時の話をしながら教室までの廊下・階段を歩いていた。

『あつ！1年2組の教室はつけーん！！！』
と実菜は言った。

『ほんとだぁー！！なんかワクワクするねっ！！』
『うん！！』

2人は教室に入る・・・。
するとそこには・・・

あたしみたいな茶パツの子や、
ギャル系の子がいた。

正直怖かった・・・。

教室に入るとさっそく自分の席を探した。

『麗奈美ー！！うちの席前後だねー』

と実菜が嬉しそうに言う。

実菜もあたしと同じでこの高校に知り合いはいない。

『あつ！そーいえばさぁー実菜ケータイ持ってる？？』
とあたしは実菜に聞いた。

『うん！！持ってるー』

『じゃあーメアド交換しよー！！』

と2人はメアドを交換していた時に・・・

『ねえー！！その茶パツー！！！！』

とギャル系の子が話かけてきた。

きつと・・・イジメられる・・・。

そう思っていた・・・。

出会い3

あたしは不安でいっぱいだった。

その時またギャル系の子が口を開いた。

『ねえー！！悠里ゆりと仲良くしない？』

あたしはすごくビックリした。

『うん！！いいよ。あたし麗奈美』

と答えた。

『麗奈美ー？！悠里って呼んでイイよ！！』

『じゃあー悠里って呼ぶね！よろしくね！！』

『ってかー麗奈美のダチ？？』

と今度はあたしの友達になったばかりの実菜を指さした。

『うん。そうだよ！！』

とあたしは答えた。

悠里は

『あんだ名前は？？』

と聞いた。

『黒崎実菜っていいいます。』

と実菜は答えた。

『実菜・・・よろしくねえー！！』

とその時チャイムが鳴った。

キーン コーン カーン コーン・・・

と同時に担任が教室に入ってくる。

『おはようございます！！今日からこのクラスを受け持つ・・・』

黒板に字を書き始めた。

黒板に『高島奈緒子たかしま なおこ』

と書いた。

その後、簡単な自己紹介をした。

『私は、1975年12月18日生まれのB型で・・・』

『先生ー！！年言っちゃっていいのかよー！！』

といきなりあたしの隣の席の男子が大きい声で言った。

『おおーっ32歳ー？？独身ー？？』

と今度は実菜の席の隣の男子が叫んだ。

そしたらクラスがすごく盛り上がった。

『もぉー！！じゃあ私の自己紹介終わりーっ！！みんなーよろしくねー』

すごく元気のある先生で

その時のあたしはいい先生にあたってよかったあーと思っていた。

新しいダチ

その後、入学式がはじまった。

入学式は1時間くらいで終わり、その後下校。

あたしは、帰る方向が同じ悠里と帰ることにした。

『麗奈美ー！帰り悠里のダチもいるけどいい？』

と悠里が聞いた。

『うん！いいよー』

と教室で帰りの支度したくをしながらみんなに聞こえるくらいの声で話していた。

『じゃあー麗奈美また明日ねっ今日メールするよー！』
と実菜がそう言って教室を出た。

『麗奈美ー帰ろォー』

悠里は帰り支度を終え麗奈美の席にきた。

『うん。』

そして2人は教室を出た。

あたしと悠里は靴箱にむかった。

そして、靴箱につくといきなり

『悠里おせえよっ！』

『待たせんなよっ！！』

『今日の帰りはドコ寄るー？？』

と3人の悠里の友達が立っていてそう言った。

『わりー遅れて・・・今日から麗奈美もいるけどいい？』

悠里はあたしを指差して3人の友達にそう言った。

『悠里の新ダチ？』

1人が聞いた。

『今日仲良くなったばっかなんだよっ』

悠里が答えた。

『あたし、大橋おおはし つぐみよろしく』

『あたしは日向^{ひゅうが} 瑠樹^{るき} 瑠樹^{るき}って呼べっ』

『あたしはあー水田^{みずた} 真理^{まり}ヨロー!!』

と3人はあたしにあいさつした。

3人とも髪が茶パツや金髪で化粧も濃くてギャルっぽかった。

『・・・麗奈美ちゃんだっけー??』

と、つぐみって子に聞かれた。

『うん!! あっ! 麗奈美って呼んでいいよおー』

あたしは言った。

その後、瑠樹が口を開いた。

『じゃあー今日はゲーセンいかねえー??』

『賛成ー!!!』

5人でゲーセンに行くことにした。

新しいダチ2

あたしたちは、5人で初メンで初プリを撮った。
5枚撮った。

その後、クレインゲームでたくさんお金を使い
気づけばあたしは2000円も使ってしまった。

あたしのお小遣いは5000円でまだ今月は始まったばかりなの
に・・・。

とその時、瑠樹が

『あーもうゲーセンあきたー次行こう!!』
と言った。

『じゃー次行こー次!!次カラオケ行く?!』
と真理が聞いた。

『OK!!』

『行こう!行こう!!』

『行くうー!!』

と3人は答えた。

『おい!麗奈美はあー?行く?行くよなあー?』
と悠里が言った。

『・・・。あたし今金ないさあー・・・ごめんカラオケ、パスして
いい??』

とあたしは言った。

『あー?!まじかよ!麗奈美バイトしてねえの??』

『うん・・・ってかうちの高校バイト禁止じゃん・・・。』

『はあー?!マジかよオ!!麗奈美まじめじゃーん!!』

『うちら4人バイトしているよっ!!麗奈美も入る??』

『あたしも入っていいかなあー?』

『うん!!いいって。じゃあーうちら今週の土曜日にバイトあるか
ら麗奈美も来いっ!!』

『うん！！』

あたしは、少しでもお小遣いを増やして少しでも
楽な生活を送りたかったから、その時のあたしには、
このチャンスを逃すわけにはいかなかった。

バイトは学校の規則を破っていることは分かっていた。

でも・・・あたしはお金に困っていたからしょうがないと思った・・・。

家に帰るといつも通り家族がみんなそろって夕飯を食べていた。

『麗奈美ー！！学校どうだった？？』

お母さんが優しくあたしに聞いた。

『いいクラスだったし！友達もできたよー！！！！』
とあたし言った。

新しいダチ3

次の日・・・

『遅刻だぁー遅刻うー！！！！』

とあわてて学校の門をくぐるあたし。

『ちよつと待てー！！』

とそこには教頭が立っていた。

あたしはイヤな予感がした・・・。

『お前、スカートのたけ短いぞっ！！』

やっぱり・・・。

でも、あたしは、そんなのかまわずスルーした。

そしたら、教頭があたしのカバンに書いてある名前をみて

『1年2組川井麗奈美・・・次短かったら指導だな！！』

あたしはムカつときて、

『はぁ??勝手にすればぁー??』

と言ってやった。

教室につくと8時30分だった。

5分ちこくした。

『麗奈美ーおい！お前くんのおせえぞっ！！』

と悠里が大きい声で言った。

教壇には担任の高島が立っている。

あたしは悠里に向かって

『遅くねえーよっ！！遅刻上等ー！！』

と叫んであたしは席についた。

後ろから

『麗奈美！おはよう』

と実菜が声をかけた。

『おはよォーっ！！実菜っ』

休み時間にはいつも悠里があたしの席に来るけど、悠里と実菜はあんまり仲のいいように見えない・・・。

『麗奈美ー！！今日帰りどつか寄つてくー??』

と3人でいる時によく悠里が聞いてくる。

『あたしーお金ないつて。』

あたしは答えた。

なるべく3人で話を・・・と思ってあたしは考えてた

その時、悠里が口を開いた

『そーいば悠里ー実菜のアド知らないから教えてー!!』

『うん！いいよー』

『じゃー後でアド紙に書いて渡すねー!!』

『うんー!!ヨローってかぁー機種ドコ??』

『私、ドコモだよぉー!!悠里はぁー?』

『悠里はーa u』

『へえー!!そーいえばさぁー悠里はプロフとか作ってる??』

『ああーあるよ!!今日送ってやるよ!』

気づけばこの会話にはあたしは入ってない・・・。

2人で仲良く話してたから・・・その中にはいれなくて・・・

その時のあたしにはこの2人はすごく仲良しに見えた・・・。

仲間はずれ

『あー・・・また今日も遅刻うー?!』

と叫びながらあたしは学校の門をくぐった。

『ラッキー！今日は教頭門に立ってない!!』

とあたしは確認し走った。

『おーい!!!待てえー川井ー!!』

あたしは聞こえないふりをしてスルーした。

『教頭なんて楽勝ー!!!』

今日は、8時20分に教室についた。

みんなが楽しそうに騒いでる。

実菜があたしに気づいて

『おおー麗奈美今日来るの早いじゃん!!』
と言った。

『麗奈美おはあー!!』

とあたしの席に座っていた悠里が言った。

『おはよオー!!!ってか何してんのー??』

あたしは聞いた。

『今、プリ帳交換して見てたんだよ』

と悠里が言った。

『ねえー悠里!このプリの変顔まじウケルー』

実菜が悠里のプリ帳にはってあるプリを指差した。

『はあー?!それ良くなっ??』

『このプリキモーイ!!』

と実菜が言って大笑いした。

2人は楽しそうに話している。

あたしはその会話には入れてない・・・。

あたしは???

もういらなの・・・？

その時、悠里が話かけてきた。

『おい麗奈美ー！！話にはいれよっ！！』
以外だと思った。

いつもあたしには悠里が自分さえよければいいと言うような人に見えていたのに全然ちがった。

悠里は、ギャルだけどちゃんと周りを見れるいい子だった。

『ああーごめん今ボーっとしてたみたい・・・』
と答えた。

『麗奈美そーいうこと多いよなあー！！』

『うん・・・ってかーバイト行くの明日だよねー』

『ああー！！そうそう！！明日の朝8時に悠里っチ家来い！』

『悠里の家ドコにあるうー？』

『ああーごめん。麗奈美、悠里っチ家知らないかあー・・・』

『じゃあーさあー・・・』

と2人で話してる時に・・・

『ねえー！！悠里ー今度プリ撮り行こうねー！！』

と実菜が割り込んできた。

『あーいいよっ！！』

悠里は言った。

『悠里いつヒマー??』

と次々に実菜は悠里に質問している。

あたしは実菜の割り込みにむかついた。

『3人でいるのに何であたしは会話の中に入ってないの？
ってか実菜はあたしを仲間はずれにしたいの??あたしが気に入らないなら』

言えはいいいじゃん！！こそこそしゃーがって！！！！』

とあたしは怒りが爆発した

みんながあたしに注目した。

その時ちょうど・・

キンコンカンコン・・・

チャイムが鳴って高島が教室に入ってきた。

実菜とのけんか

その日は1日中実菜と話すことはなかった。

あたしは休み時間、1人で読書をしていた。

あたしはそれでもいいと思った。

あたしが悪いわけじゃないんだし・・・。

けんかして誤らなければそれで友達の縁が切れるんだ・・・。
友達なんてそんなもんだと思っていた。

でも・・・

『おいー！麗奈美ー何クヨクヨしてんだよッ！！』

と悠里の声がした。

振り返ると悠里が1人でいた。

この教室にはあたしと悠里だけがいる。

『悠里！何で？実菜と一緒にだったんじゃないの？？』

『んー・・・悠里も実菜とけんかしたあー！！』

あたしは驚いた・・・。

けんか？悠里と実菜が・・・？

あたしは聞いた。

『どうして？？』

『悠里ねえーあの性格嫌いなんだよー！！しつこいじゃん！！』
と悠里は言った。

けど・・・あたしは何か違う理由があると思った。

多分・・・悠里はあたしのために実菜とけんかしたんだと思う。

そして、あたしと実菜はけんかしたまま1日が終わった。

土曜日悠里とつぐみと瑠樹と真里と一緒に悠里たちのバイト先に行
った。

そこはフツのコンビニだった。

あたしも今日から働くことに決めた。

レジの仕事をやったり品をならべたり・・・

このコンビには人がよく来るので1日がすごく大変だった。
午前9時から仕事してもう午後5時だった。

と、そんな時、女の人が店に入ってきて、

『悠里！仕事おつかれー！！次うちらが変わるよー！』
と言って店のおくの部屋に行った。

『じゃーみんな今日は帰るかぁー！！』
と悠里が言った。

『うん。』

5人は店を出た。

次の日、あたしが起きたのは、夕方5時だった。

『あたし・・・こんなに寝ちゃったんだ・・・。』

今日はすごくルーズな1日だった。

いつもとはちがってメールも今日は1通もこない。

あたしは、ベッドからおりて、何をするのでもなく
ただボーっと自分の世界に入っていた。

<そーいえば明日は学校かぁー・・・

実菜と顔あわせるのイヤだなぁーツ・・・

席、前後ってありえないーっ・・・>

ただあたしは、そんなことを考えていた。

実菜とのけんか2

『……え……ん！』

『……え……ん！』

『おねえちゃん！もオ - 学校遅れてもしらないよっ！』
そう言ったのは、妹の麗美^{れみね}音だった。

『えっ？！もう朝？！』

と、言つてあたしは起きて学校へ行く支度をした。

『あーもお6時50分じゃんっ！！』

急いで制服に着替え朝食をとらず家を出た。

ギリギリセーフで電車に乗れた。

車内であたしは、知り合いがいないかキョロキョロしていた。

そしたら、美桜高のあたしと同じ制服を着た

見覚えのない女の子があたしを見ている。

あたしは気になったから、その子の所に近づいた。

そして、あたしはその子に聞いてみた。

『あの……となり座つてもいいですか？』

『はいっ！どーぞっ。』

と、その子は答えた。

『あのぉ……同じ高校ですよねっ？』

『はい！そうですっ！！』

その子は答えた。

しばらくすると、学校が見えてきてあたしはその子と電車をおりた。

お互い名前を知らない同士。

あたしは……先輩だいいなあーと思つていた。

とても優しい人だった。

学校の門をくぐると、その子は

『今日一緒に学校に来て良かった！！ありがとう 川井さんっ！』
と、言つて走つて行つてしまった。

『何で あたしの名字を知っているんだ・・・?!』
あたしは考えていた。

そこにつぐみが来た。

『麗奈美っ！おはよーっ！朝、会うのは初だねっ！』
と言った。

『うん。そーだねっ！！ってかーあー悠里は?!』

『うん・・・?!あいつ多分遅刻じゃねえー?!』

『そーなんだあー』

『ってかあー麗奈美ンちクラスに入学式ん時学校来てねえ奴いねえ
ー?!』

『うーんっ?!いたかなあーそんな子っ?!』

『知らねえーの?!クラスのメンなのにつ?!』

『うん・・・。』

『そっかあー。』

と話しているうちに靴箱についた。
靴をぬいでうわばきにはきかえる。

『麗奈美ちゃん・・・?!おはようっ!』

その時、うしろから声がした。

実菜とのけんか3

振り向くとそこには、実菜の友達が立っていた。

『おはようっ！！』

あたしは、元気よく言った、

『あのねーっ・・・麗奈美ちゃん・・・』

『・・・?!』

『あっ！！ごめん。いきなり・・・私、大木姫乃。同じクラスだからよろしくねっ。』

『あー。うんっ！！あっ！！麗奈美でいいよっ！！』

『じゃー私のことも姫乃で・・・』

『うんっ！！』

『あっ！！そうそう・・・。麗奈美・・・ちゃん・・・あっ！！麗奈美っ・・・ちや・・・』

『なれてからでもいいよっ！！』

『ごめんね・・・。あのね・・・実菜とけんかしてるよね?!』

『・・・うん・・・』

『実菜と仲直りしてあげてほしいんだあー・・・』

『えっ?!どうして?!』

あたしは聞いた。

『うん・・・実菜すごくおちこんで・・・』

『そーなんだあーっ・・・』

姫乃と話している間にもう教室の前まできた。

『・・・じゃあーっ・・・麗奈美・・・実菜のこと考えておいて・・・』

『う・・・ん・・・』

姫乃は、あたしより先に教室に入っていた。

その後、あたしも入った。

その日は、授業よりも実菜とのけんかのことを考えてしまっていた。

・・。

その日は、結局結論が出ずそれから1週間が過ぎた。
ある日、あたしは実菜を呼んだ。

『あのさっ 実菜・・・』

『ごめんっ！！麗奈美っ！！私が悪かったのっ！！』

実菜はあたしが言う前に先に言った。

『実菜っ！！あたしも悪かった・・・ごめん』

仲直り

その日の夕方、あたしは実菜と学校の近くにあるデパートの行った。オソロのキーホルダーを買って仲直りの印にした。

『あつー！麗奈美っ！』

『何っ？！』

『今日、家にとまって来なあっ？！』

『まじっ？！行く行くっ！！』

明日は土曜日だし、学校も休みだしっ。

あたしは実菜の家に初めて行った。

実菜の家は2階建てでフツの家だった。

家の中は、すぐくキレイにされていた。

実菜の部屋に入ると・・・

机の上には、教科書や問題集がいろいろつんであつて、

ノートも開いてあり、そこには、数学の問題が何個も解いてあつた。

壁には、コルクボードが掛けてあり、写真が付けてあつた。

その写真には・・・

実菜と男の子が写っている。

『ねえ・・・実菜っ！！この写真に写っている人って・・・』

『あつ！それね・・・この前できた彼氏っ！！』

『へえ・・・ってかいつからっ？！』

『うーんっ・・・麗奈美とけんかした日の夕方、私1人で街を歩いていたら』

偶然会って仲良くなつたんだよっ。』

へえーそうなんだっ・・・。名前はっ？！』

『名前っ？！龍飛^{りゅうと}』

『へえーっ・・・』

といいながらあたしはもう1度写真を見た。

『麗奈美はっ？！』

『えっ?!』

『いないのっ?! 彼氏っ?!』

『あー。うんっ!?! いないよっ。』

『そっかあー』

その夜は、実菜とさわぎまくって気づけば朝だった。

仲直り2

今日から5月だっ。

今日で入学して約1ヶ月が過ぎた今ではクラスのグループももうできていてはっちゃんけ組みとジミーズって分かりやすく分かれている……。

『あははは……』

『あーっもオー笑いすぎておなかないたいー!!』

『ってかー昨日から起きててねむいよーっ。』

『あたし寝るっ!!』

『えっ?!麗奈美まぢ?!寝ちやうの?!』

『zzzz……』

『……美?!』

『……奈美っ?!起きてっ!!』

『んっ?!』

『麗奈美っ!!』

『んーっ?!実菜っ?!』

あたしは眠たそうな目をこすりながら起きた。

あたしが実菜に起こされたのは、夕方だった。

時計はは、4時だった。

あたしこんなに寝ちやっただ……。

まだ頭がボーっとしている……。

……。

『もオー!!麗奈美イー起きてよっ!!夕方だよっ!!』

『あゝー。ごめんごめんっ!!』

あたしはあわてて起きた。

そして、実菜の家を出た。

帰りは、実菜に途中までおくってもらった。

『実菜 もういいよっ。ここから1人で帰るから。』

『うん……。麗奈美……。気をつけて帰んなよっ?!』

『大丈夫だって!! ありがとう』

そう言った後、あたしと実菜は少しだまってしまった。

。。。。。

『私っ……。麗奈美と仲良くなれて良かった!! これからも友達でいてっ!!』

実菜が言った。

『もちだしーっ!!』

あたしはそう言った。

『明日学校で会おう!!』

『うんっ!! 実菜ありがとう!!』

一目惚れ

5月になり、この学校にもなれてきた頃。
いつもと変わらない日々を過ごしていた。

あたしが知らない間に実菜と悠里も仲直りをしていた。

今日は、久しぶりにあたしは早く学校に行った。

『実菜っ！！悠里っ！！おはようっ！！』

『おはよーっ！！』

『おう！麗奈美、今日来んの早えーじゃんっ！！』

『うんっ！！ってかー悠里どうしたーっ？！そのケガ？！』

悠里はひざにケガをしていた。

『あーコレ？！昨日のバスケットで転んで・・・』

『まじ？！大丈夫？！』

『うんっ！！ってかーそれより今日かつこいい先輩見つけたー！！』

『マジ？！』

『どこで？！』

あたしと実菜は聞いた。

『えっと・・・保健室の所の廊下！！』

『まじーっ？！』

『いいなあーっ！！』

『ってか何年？！』

『多分2年じゃないっ？！うわばきのラインの色が緑だったし。』

『2年かあーっ！！いいなあー 見たいなあー！！』

『ってかあーっ2人で歩いていて2人ともかつこ良かったー！！』

『悠里それまじでー？！』

『うんっ！！』

『何組か分かるー？！』

『さあー悠里も今日会ったばっかだしっ・・・』

『そっかー！！』

『じゃーさー昼休み保健室行かない?!』

悠里はあたしと実菜に言った。

『行く行くーっ!!』

あたしはそう答えた。

『あれーっ?!実菜はっ?!』

『ごめーんっ!!今日の昼休みは、姫乃と一緒に語る約束してるからー・・・ごめんねー』

実菜はそう言った。

『うん。分かった。』

『じゃー麗奈美2人で行くかー』

そして昼休みになった。

あたしと悠里は一緒に昼ご飯を食べてすぐに保健室の前の廊下に行った。

5分くらい待っていると・・・

『あっ!!来た来たっ!!あの2人だよっ!!麗奈美ーっ』

『えっ?!ドコ?ドコ?』

『アレッ!!』

悠里が指指した方を見た。

一目惚れ2

『うわっ！！かっこいいーっ！！』

悠里の指差した先にはあたしのタイプの男の人がいた。

『でしょーっ！！もじかっこいいもんっ！！』

『ってかー悠里どっちがスキ？！』

『悠里はー右の前髪長い人 麗奈美はーっ？！』

『あたし・・・左のウルフで茶パツの人』

『ねえ 麗奈美ー近くまで行ってみようよ』

『うん！行く行くー！！』

と言うことで階段からおりて来た2人をねらって

今日は名前だけを見ようと思っていた。

『悠里っ！！来たよっ！！』

『うん・・・。』

そう言いながらあたしと悠里は廊下を歩いた。

そして・・・すれちがった。

あたしはすぐドキドキで下をむいてしまつて・・・一瞬だけちゃんと見れた。

『ねえ・・・麗奈美っ！！ちゃんと名札見た？！』

『うーん・・・。一瞬だけね・・・。小田って名字だった。』

『名前見てないの？！』

『ってかー見れなかったー。さいやくー！！』

『悠里は見たよ。ちゃんと 原田 翔って書いてあったー。』

『バカかっこいいよね』

『まぢやばいもんっ！！』

『悠里・・・あたし多分・・・あの人に一目惚れした。』

『麗奈美まじー？！あついかもー。』

そしてあたしと悠里は、その日から恋をした。

毎日毎日わざわざとおらないような場所をとってまで
あの人を見て、クラスも調べたり、そうじ場所も見つけて
わざわざとおるフリしてガン見したりした。
そんなあたしと悠里の行動はストーカーだった。
でもあたし達はそれでも良かった。
あの人を好きな気持ちは誰にも負けないから。
毎日毎日楽しい日々が続いた。
毎日学校に来るのがあの人を見に来るようなモノだった。
そして気づけばもう明日から夏休み。

一目惚れ3

『おい麗奈美ー！！そっいえば麗奈美の好きな人・・・小田だっけ？！』

と、そう言ったのは悠里だった。

『うん。』

『その人男バスだよ部活。悠里女バスで体育館で練習した時見たぜっ。』

『まぢー？！いいなーっ！！何でもっと早く教えてくれないの？！』

『あーわりーわりーっ！！そっいえば名前が龍飛りゅうとだよ。その人っ！

！』

『龍飛？！・・・？！小田龍飛・・・超かつこいいっ！！』

『悠里っありがとう教えてくれてっ！！』

『おうっ！！』

そしてその日もいつもと同じように好きな人が見れたい日だった。

今日から夏休みになった。

夏休みは休みなくあたしはバイトを入れた。悠里達にはあまり会わなかった。

ルルル・・・ルルル・・・

ケータイが鳴った。

あたしは慌てて電話に出た。

『もしもし』

『あっ！もしもし麗奈美？！悠里だけど・・・』

『悠里？！何か用っ？！』

『今ね、小田先輩と彼女歩いているとこ見たよっ』

『えっ・・・？！』

あたしは、その話を聞いてすごくビックリして、手から

ケータイが床に落ちた。

シヨックだった・・・。

『ちよつと・・・麗奈美ーっ?!』

あたしはあわててケータイを拾った。

『あつ ごめんっ!! ってかーあんなカッコ良い人に彼女いないわけないもんねえー』

『・・・。ごめん麗奈美っ。悠里言わない方が良かったね・・・。』

『そんなことないよっ!! それより悠里の好きな原田先輩は?!』

『あー原田先輩・・・彼女いないみたい・・・。かつこいいのに・・・。』

『そーなんだーいいなー。ってか悠里ねらっちゃえっ!!』

『うーん・・・でも話したことないしなあーっ・・・。』

『がんばれ悠里っ!!』

『うんっ!! じゃー麗奈美ー小田先輩の彼女が誰か分かったらまた電話するー。』

『よろしくね。じゃーばいばい。』

そう言って電話をきった。

あたしはこの日から小田先輩の彼女が気になって学校に早く行きたくなった。

学校に行けば小田先輩を見れるし、

もしかしたら彼女と2人話している所を見れるかもしれない。

あたしはただライバルを見てみたかっただけかもしれない・・・。

1日1日が早く終わればいいのにと思っていると長い1日になって

1日が早く終わってほしくないと思えば1日が早く終わっていった。

そんなころ・・・

ルルル・・・ルルル・・・

ケータイが鳴った。

ケータイの画面には【実菜】と表示されていた。

どこかなつかしいような気がした。

夏休み入ってまだ1度も会っていなかったから。

『もしもし?!』

『あつ!もしもし麗奈美?!』

『うんっ!』

『良かったあー。やっと麗奈美電話に出てくれた』

『えっ?!』

『だって麗奈美いつも電話かけると出てくれないじゃんっ……。』

『あつ ごめん!!--!仕事中には出れないさー』

一目惚れ4

『仕事?! アルバイトかぁー!! すごいね麗奈美っ』

『そっかぁー?!』

『あっ!! そうそう明日うちの近くで花火大会があるんだよ。一緒に行かないっ?!』

『行く行くー!!』

あたしは迷わず答えた。

『じゃー行こー!! じゃー夕方4時つところに私の家に来てくれる?!』

『うん! 分かった!。ってかゆかたで行く?!』

『うん!! じゃーまた明日ねー!!』

『うん。バイバーイ』

電話がきれた。

「花火大会かぁー楽しみだなーっ!! ゆかた・・・久しぶりに着るなーっ・・・」

そんなことを思いながら1日は早く終わった。

次の日、夏休みの最後の日あたしは昨日実菜と約束した

花火大会に行くことになった。

夕方になり、あたしはゆかたに着替えて実菜の家に向かった。

実菜の家に行くと実菜もゆかたに着替えていて
すごくかわいいゆかたを着ていた。

『実菜そのゆかたかわいいねー!!』

『似合ってる?!』

『うん!!』

『ありがとっ。麗奈美もかわいいよっ!!』

『そう?!』

花火大会まで時間があるからあたしと実菜は
実菜の家でいろいろ話をした。

あたしは、実菜に気になっていた質問をした。

『そーいえば実菜彼氏いたよね。どうなった?!!』

『あー・・・別れたよ。』

『えっ?!何で?!!』

『だって・・・彼氏には、私のほかに女がいて・・・』

『えっ?!ウソー?!』

『本当だよ。』

『実菜・・・ごめんね・・・イヤな話させちゃって』

『うん。いいよ 別に。』

そーいえばこの前来た時に見たコルクボードにはってあった写真はもうはってない。

『ってかー私の話はもういいの。麗奈美はー恋してる?!!』

『・・・うん。いちゃうね・・・。』

『へえーっ!!誰?!ってかー彼氏?!!』

『彼氏じゃないよっ!!好きな人ね・・・。』

『へえー!!いいじゃんっ!!』

『そう?でもきつと叶わない恋だよっ』

『えっ?!何でえー?!』

『だって先輩だし・・・彼女いるし・・・。』

『へえーそうなんだー・・・でもがんばれ麗奈美っ』

『うんっ!!がんばるよー!!』

と、2人で恋の話をしていると、時間はどんどんすぎていき、気づけば7時になっていた。

『ねえ実菜!!もう7時だね』

『えっ?!ウソー!!』

実菜と話しているとついつい長話になって時間を忘れてしまつくらいしゃべって盛り上がる。

『じゃー麗奈美ー花火見に行こう!!』

『うん!!』

2人で花火がキレイに見えて出店がでている商店街に行った。

ヒュー ドカン・・・

ヒュー ドカン・・・

ちょうど商店街についた時花火が上がった。

『うわー！！きれい！！見た？見たー？！』

『うん！！見た！！』

ヒュー ドカン・・・

『次はすごく大きいのだよっ！！実菜っ！！』

『うん。クレイー！！』

あたしは、実菜と花火を見ながら出店も見ながら歩いた。

出店は、いろいろあつて食べ物もいろいろ売っていた。

『ねえ麗奈美っ！！チョコバナナ食べよう！！』

『うん！！食べるー！！』

あたしと実菜はチョコバナナを食べた後、クレープやりんごあめ、パイナップル、たこ焼きを食べた。

そして、オソロのお面を買って2人でつけた。

帰る時、わたがしを買って2人で食べて実菜の家に戻った。

実菜の家についた時はもう8時半だった。

あたしは急いで実菜の家を出た。

『実菜！！ごめん電車で帰んなきゃなんないから帰るね』

『うん。明日から学校だもんね』

『うんっ！！明日学校で会おう』

『後期もよろしくねー麗奈美』

『うん！！じゃーばいばーいっ！！』

今日で楽しかった長い休みは終わった。

夏の終わり

今日から後期が始まった。

9月になったものにもかかわらずまだ暑い日が続いた。
今日は、席がえの日。

くじで席を決めることにした。

『席がえ楽しみだねー!! 誰となるのかなー?!』
と後ろの席の実菜が声をかける。

『楽しみだね』

と実菜と話している間にくじの順番がまわってきた。

『次・・・麗奈美ちゃんの番だよっ!!』
と姫乃が言った。

『あー!! ごめんっ!!』

あたしは袋に入っている紙を1枚とった。
広げてみるとその紙には・・・

5番

と書いてあった。

『麗奈美ー!! 何番?! 私12番・・・』

『はあー?! 実菜12番っ?! あたし5番!!』

『うそーっ?! 絶対席遠くなっちゃうじゃんっ!!』

『さいやくー!!』

『あっ!! 悠里は?!』

『聞いてみるかーっ!!』

『悠里ー!! 何番だったー?!』

『悠里はあー6ばーんっ!!』

『まぢ?! 近いよね?! きつと』

『はいじゃーみんな席ついて!! 席の順番は、黒板を見て席を動かして下さい。』

と高島【担任】が言った。

あたしは黒板を見た。

黒板には、窓側から男女別、1～6番、7～12番、13……と書いてあった。

あたしは悠里と同じ班になれた。

あたしが悠里の前の席。

実菜は姫乃と同じ班になった。

そして今日からまた小田先輩と原田先輩が見れる。

あたしは、すごくウキウキの気分だったが……

もしも偶然小田先輩の彼女を見てしまったらあたしはどうなるのかすごく怖くて少し見たくない気もあった。

『麗奈美っ！ちょっと職員室行くんだけど行く？』

『うん！じゃーついてくー』

あたしは、休み時間悠里と一緒に職員室に行くことにした。

『悠里ー職員室に何しに行くの？！』

『出し忘れのプリント出しに行くのっ！！』

『プリント？！何かあったっけ？』

『英語のっ！！』

『英語のプリントなんか宿題にあったっけ？！』

『あったしいー！！麗奈美忘れてるーっ！！』

『まア……いいよっ！！そのうち思い出すらーっ！！』

『あはは……』

と話していたらもう職員室の前まで来た。

『失礼します。』

悠里は職員室に入っっていた。

あたしは職員室の前で待っていた。

その時、小田先輩と彼女を見た。

2人でならんで廊下を歩いていた。

やっぱりシヨックが大きかった。

見なきゃよかったなあ……。

小田先輩と彼女が仲良く話していた時、あたしは小田先輩と

目が合ってしまった。
ヤバイ・・・ガン見しすぎた・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9268c/>

;*: にじ ;*:

2010年12月11日15時12分発行